

ろしあ おろしや おそろしや？

生物資源学部 渡辺晋生

永久凍土が融けています。地球温暖化の兆しをモニターするため、また地球規模の水・熱循環メカニズムを明らかにするために、私達は永久凍土地帯の調査に赴きます。シベリアや南極などの極地では、予定通りに滞在許可が下りなかったり、飛行機や船が運行されず、数日の停滞を強いられる事態が頻発します。調査地に到達した後も、天候の急変や体力の限界により作業が中断する機会が続出します。こうした時間を有効に過ごすため、調査には何冊かの本を持って行きます。

英語も日本語も全く通じない最果てのロシア・シベリア。人っ子一人見かけぬ極北ツンドラ。厳寒の地での穴掘り。そんな調査に携えた本の一冊に井上靖著「おろしや国酔夢譚」があります。鎖国真っ只中の十八世紀、大黒屋光太夫ら伊勢の船乗り達がアリューシャン列島に流れ着き、シベリア放浪を経て、時の女帝エカテリーナ2世と謁見し、遂には日本へ帰りつく。そんな話です。近鉄で名古屋方面に向かう途中、伊勢若松駅の手前で目に入る「大黒屋光太夫生誕の地」との看板から彼らの名前を知っている人もいることでしょう。三重大からシベリアへ、そんな地理的身近さから選んだ本でした。

少しずつですが分るようになっていくロシア語。いちいち思うように進まないロシア国内の移動や決まり事。美しい自然、暖かい人々。光太夫らの境遇と調査地の自分の現状が重なります。氷雪、飢え、過酷な生活により一人また一人と漂民達は倒れていきます。これに比べたら、装備も食料も十分な調査生活に文句など言っただけではいられません。光太夫達の尽きることない好奇心。科学を志す者として見習うべきものがあります。この回のシベリア調査は、光太夫ら漂民達の苦節・困難に涙し、心揺さぶられ、また彼らの行動から自らの心を鼓舞した数ヶ月となりました。

まもなく長い夏休み。旅行に出かける機会があれば、その地に関係深い本を持って行ってみたいかがでしょうか。あるいは、暑い夏に寒い国の本を読み、その生活に思いを馳せてみるのもよいかもしれません。

(わたなべ くにお)